

平和の礎

軍人軍属短期在職者が語り継ぐ労苦 XII



平和の礎

軍人軍属短期在職者が語り継ぐ労苦 XII

平和の礎

軍人軍属短期在職者が語り継ぐ労苦 XII

平成十四年三月二十九日 印刷

平成十四年三月二十九日 発行

編集 東京都新宿区西新宿二丁目六番一号
発行 平和祈念事業特別基金
印刷 文唱堂印刷株式会社

まえがき

平和祈念事業特別基金は、今次大戦における尊い戦争犠牲を銘記し、かつ、永遠の平和を祈念するため、関係者の労苦について国民の理解を深めること等により、関係者に対し慰藉の念を示す事業を行うことを目的として「平和祈念事業特別基金等に関する法律」に基づいて設立されました。

当基金では、その業務の一環として、関係者の労苦に関する調査研究を実施しており、この「平和の礎―軍人軍属短期在職者が語り継ぐ労苦―」はその成果を取りまとめたものです。

この業務の実施に当たり、当基金は、平成元年度から社団法人元軍人軍属短期在職者協力協会に、主として次の三つの観点から従軍体験者の手記の執筆あるいは聞き取り等により、労苦の実態を明らかにすることをねらいとして調査研究を委託してきました。

- (一) 兵役と家族状況
- (二) 軍務・戦闘と意識
- (三) 復員後の生活と家族

同協会では、全国的に活発な調査研究活動を展開し、関係者から数多くの体験記等を収集し整理の上、「恩給欠格者に係る労苦に関する調査研究報告書」として基金に報告がなされました。

本書は、体験者にして初めて明らかにされる具体的な労苦の記録であります。報告された労苦記録の各編には、各地で軍務に服し、過酷な戦闘体験をはじめとして、特に短期の軍務服役であるための様々な労苦の実態が、簡潔であるが往時を想起させるに十分な迫真の筆致で生々しく描かれています。

今次大戦は、成年男子総数の四分の一、はほ二世帯に一人強が出征兵士として戦線に投入される等、人もモノも根こそぎ動員する総力戦となりました。戦後五十六年余りが経過し、戦後生まれの世代が人口のほぼ三分の二を占め、戦争に関する意識の風化が進んでいるといわれる今日、軍人軍属短期在職者の労苦を徒労に終わらせないためにも、この労苦を子々孫々に語り継いでいくことが必要であり、そのためにも、この書は貴重なものと考えます。

本巻には、軍人として死没された夫や兄の軍歴を回想する女性の手記を含む七十四人の方々の労苦の記録が掲載されており、第一巻から数えると八百二十八編の体験記録が所収されたことになります。

最後に、実際に執筆に関わられた多くの方々のご協力と調査研究に当たられた協会関係者のご努力に感謝するとともに、本書が関係者のご労苦について国民の皆様の理解を深め、かつ、後世に伝えるための一助となれば幸いです。

平成十四年三月

平和祈念事業特別基金

理事長

上村知昭

軍人軍属短期在職者が語り継ぐ労苦

XII

目次

まえがき

上村 知昭

第一部 勞苦体験記

〔大陸〕（北 支）

河南作戰 洛陽攻略

歩兵第一百連隊第三大隊

晋察冀辺区作戰記

我が主計戦記

北支山西省を北から南へ

〔大陸〕（中 支）

中支戦線での司令部勤務

私の追憶

軍隊生活の思い出

初年兵教育から中支で

〔大陸〕（南 支）

青春を捧げた

軍隊生活の思い出（その一）

大竹 清照 96

南支から中支へ

召集の思い出（その一）

竹内 章 108

〔大陸〕（朝 鮮）

幹候受験をしなかった虎兵团入隊兵

林 慶治 125

朝鮮歩兵第四十九連隊補充隊

歩兵二十三部隊勤務歴

上津原 猛 137

〔南方〕

玉砕地 グアム島の風

中矢 正雄 151

東部ニューギニア

慟哭の戦場（その二）

浦沢 良平 168

〔海 軍〕

追想 第五十五号海防艦

― 亡き戦友に捧げる ―

一瀬 千萬太 180

〔航空〕

満州より比島へ

生きて帰れた航空整備員

三屋 清治 195

初陣は常德殲滅作戦

中支常德作戦 城内突入の戦い

道下 政太郎 269

二度の召集 長かった軍隊生活

山地 豊重 280

私の軍隊生活の想い出

嶋田 勇 286

英魂は故郷・屍衛兵

小屋 喜重 290

思い出の悲喜交々

矢野 美三雄 293

戦時を生きた女ひとり

新宮 美恵子 215

戦後の五十余年 悲しみを越えて

芳賀 恵子 225

大陸戦線の想い出

竹原 忠行 296

北支河南作戦 戦車第三師団機動砲兵

今野 栄志 301

自動車第二十六連隊と中国の思い出

佐久間 正夫 315

死線を越えて

大槻 二夫 321

四方 ふじ枝 325

第二部 聞き取り調査記録

〔大陸〕（北 支）

北支那の独歩大隊 孤軍奮闘す

瀬川 兼男 235

北支竹腰隊の一員として

本郷 金一 240

北支で兄と会う

斉藤 広一 245

機関銃隊員として戦務

小林 正雄 249

北支那 独立歩兵大隊の戦闘

高橋 康治 254

〔大陸〕（南 支）

私の従軍記 ― 広東から仏印へ ―

中村 喜之助 335

昭和十九年徴集 最後の初年兵

福建防衛戦

牛田 寿一 348

独立山砲第二大隊 湘桂作戦衛生隊

福島 春雄 353

若い志願兵の湘桂撤退作戦まで

三宅 良 359

〔大陸〕（中 支）

工兵隊 縁の下の苦勞

松崎 信行 264

〔大陸〕（朝 鮮）

三十二歳の第二国民兵 朝鮮縦断記

田中 菊治 365

勤勞報国 平壤で戦車攻撃訓練

船山 剛 373

〔大陸〕（満州）

従軍回顧談

本窪 充 377

私の従軍記録

守本 茂 383

私の戦中戦後

衣川 義高 387

ドンゴロスの兵隊（一）

田上 建 394

軍隊での苦勞 負けじ魂が

粘り強い人生を作ってくれた

橋川 信雄 407

三回の召集に生き残り

八十七歳でも青年

佐々木隆治郎 412

満ソ国境 第六国境守備隊の最後

内田 正規 418

強制抑留の序曲 赤痢を克服し労働

茶本 光義 423

戦車隊を体験して

石橋 孝幸 437

南満逃避行

久保田 愛 444

北支から満州、そしてシベリア

久保田 禮三 447

残念なり 陸軍十四年式拳銃

寺本 近造 452

私の従軍記

森 金次郎 459

我が青春の空白

清水 秀蔵 462

〔南方〕

電信第十五連隊健在なり

小川 昌之 470

南洋（独混第十一連隊）

エンダービー守備隊

佐々木 文治 473

運命か、

ニューギニア五十一師団生き残り

温井 一衛 483

「ビルマ」戦線 船舶工兵隊

星野 安雄 487

ビルマ戦線従軍記

玉地 静夫 491

〔海軍〕

巡洋艦「摩耶」「光島」奮戦記

渋谷平内左衛門 498

昭和十九年六月十八日

空母翔鶴と共に海没

五十嵐 清一 501

強運だった海軍志願下士

志坪 十郎 507

比島の混戦 陸に上がった海軍

水谷 義一 513

私の海軍戦歴 ―東シナ海漂流記―

武本 智弘 519

海軍工廠勤務と

歩兵第二十連隊で中国へ

塩見 輝雄 525

青春を海軍に捧げて

今泉 一郎 529

呂号五〇帰投せり

桑井 豊 535

〔航空〕

私だけの人生 特別攻撃隊の訓練

出撃命令を待つ 加美山 茂 541

第十野戦航空修理廠

少年軍属・軍人放浪の終戦後 笠島 賢二 558

日支事变当初の陸軍航空隊の活動 陶山 友也 564

南方を志願し 北方の飛行場大隊勤務 大崎 良男 569

特別攻撃隊体験 小峠 良三 575

〔内地〕

暗号電報に涙 武田 正己 582

動員室に勤務して 富田 昇 590

大陸（北支）

河南作戦 洛陽攻略

歩兵第百十連隊第三大隊

岡山県 今吉里 治

我が歩兵第百十連隊史上輝かしい一ページを記録することになった「河南作戦」の総攻撃は、昭和十九（一九四四）年四月十九日午前六時四十分と決まった。四月十九日、夜は静かに白みはじめる。我が将兵は皆無言のまま鉄兜をかぶり紐をしめ、装備の点検をはじめめる。

午前六時、総攻撃まであと四十分はある。コチコチと時を刻む腕時計の音が、いやに大きく聞こえる。皆緊

張し神経が鋭くとがる。それは運命を刻む音にも聞こえた。お互いに見苦しい死に方だけはしたくない。いつも冗談を言う戦友達もこの日だけは神妙である。ついに来る時が来た。前線に向かう将兵の覚悟は感無量である。ただ、ただ無言……。覚悟を決めた戦友達は無表情である。

昭和十九年四月十九日午前六時四十分、霸王城の台上に大小合わせて二百門の砲列が敷かれた。野戦重砲兵第六連隊（村上支隊）十五榴の砲撃で開戦の火蓋は切って落された。続いて佐賀軍砲兵、師団野砲、連隊砲、大隊砲、迫撃砲など大小合わせて二百門の砲が一斉に火を吹いた。「ダー！ ダー！ ダー！」まるで地震の様相だ。耳をつんざく砲弾の炸裂音、砂塵がもうもうとして何も見えない、何も聞こえない。ただ地

鳴りだけ、凄惨はその極に達し、黄土高原の山容は変形した。地球の最期を思わせる砲撃は二十分間続いて、七時でびたりと止まった。

それを合図に重機の支援と発煙弾に膚接して、歩兵第一百連隊第三大隊（天野大隊）、第九中隊（中野隊）、第十二中隊（三田池隊）を先頭に、師団のトッブを切って「ハト」の陣地に突っ込んだ。軍刀を振りかざす中隊長は十字の白だすき、小隊長は右肩から一本、分隊長は左腕に白の腕章をつけ、決死の勇で突っ込んだ。

第九中隊は前夜陰に乗じて敵の鉄条網の線まで潜入していた。中隊長は軍刀で鉄条網を切り、縄ばしごを使って断崖絶壁をよじ登る。壕の敵を追って台上に上がり、歩み板を渡して地隙を越える。台上は起伏に富んでいるが案外広く、ビルからビルを飛ぶような所もある。一つ間違えば、百メートル、二百メートルの谷へ落ちる。敵も必死の応戦を繰り返す。各所で白兵戦が展開され混戦状態となる。

攻撃開始以来すでに一時間、勝負はついたが友軍の犠牲者も多く、「ハト」の敵陣地の手前の谷で彼我の砲弾と敵の地雷にかかり木っ端みじんに碎けた鉄帽、雑のう、水筒等がむなしく転がり、肉の破片が散り、影形のない無残な戦友の姿を見て通った。無我夢中で敵の「ハト」の陣地を、その日の十一時十分に制圧した。

二十七陣地には林芳太郎第一百師団長、その前に黒須源之助第一百連隊長、右翼支隊に第六十三連隊長（上坂大佐）、左翼支隊に百三十九連隊長（下枝大佐）がじっと戦況を見守る。さらに後方桃花峪には、第十二軍司令官内山中将、左翼には第六十二師団長（本郷中将）、中牟を攻略した第三十七師団が鄭州を攻略し、京漢線に沿って南下、新鄭から許昌方面をうかがっていた。

第一百連隊は第三大隊が右翼隊となり「ハト」の陣地を突破し、第一大隊（潮隊）が右翼隊となり「モリ」の陣地を攻撃した。第二大隊（築村隊）は後備部隊となった。第二大隊の将兵達もまるでパノラマのよ

う展開されている戦闘を台上から見守っていた。

十一時十分、第百十連隊は「ハト」の陣地の制圧を見た。林芳太郎師団長は、第百三十九連隊（下枝大佐）に、密県攻略の挺進隊を命じた。第百六十三連隊は摩旗頂重砲陣地、漢王台地の頑強な敵に苦戦していたが、夜間攻撃で二十日午前三時、これを制圧した。

蒋介石は霸王城の陣地は陥落するものと思い、第一戦区第三十一集團軍の第十三隸下の百十師団一個師で防衛していたが、最小の犠牲で早く逃げた。第二線は、密県―登封の線の陣を構えて決戦を企図していた。洛陽東の守りは汜水鞏県の線で備えていた。

第百十連隊は破竹の勢いで枯川を渡り、広武県河陰城の西を通り、二十日、栄陽に向かって前進した。二十一日未明、第九中隊は栄城を攻撃したが友軍の砲兵隊に敵と間違えられ攻撃を受けたので、いったん下り各中隊の出揃うのを待った。そこで後尾にいた第二大隊が前衛部隊となり、逃げる敵を追撃し、蘇砦、曹李砦を陥り、栄陽に迫り、第二大隊が中央となり、第一大隊が左第一線、第三大隊が右第一線に展開しジリジ

リ攻めあげ、第二の拠点である栄陽を十五時に占領した。

四月二十一日、師団情報によれば、密県北方の山地一帯に有力なる重慶軍が既設陣地に拠り、また、有力な部隊はそれぞれ塔山、崔廟、石磐溝付近の陣地に進出しており、その兵力は少なくとも一個師団と推定され、師団命令により第百十連隊は崔廟、第百三十九連隊は石磐溝、第百六十三連隊は塔山に攻撃が命ぜられた。栄陽―密県街道には敵の死体が数多く横たわっていた。挺進隊攻撃の壮絶さがうかがわれた。この頃、携帯口糧のうち甲（米）二日分は既に食べつくして、乙（乾パン）二日分だけとなった。行けども行けども山また山で、伏牛山脈は深くいつ果てるとも知れず。歩兵の快進撃には行李はついて来られず心細い限りだった。乾パンをお粥にし飢餓をしのいだ。

四月二十二日、崔廟（道祖神）では思わぬ敵の猛反撃に遭い、我が第三大隊本部は廟の上で孤立し危機に

ひんした。各中隊は前進し、バラバラで連絡がとれない。麦の穂で頭を偽装した敵が、匍匐^{ほふく}前進で大隊本部のいる娘々廟まで二百メートルまでに迫って来た。我が装備は大隊砲一門、重機関銃一丁、軽機二、擲弾筒一筒、それに歩兵、大隊長以下指揮班三十余人、心細い限りである。私も三八式歩兵銃で三、四十発は撃った。娘々廟の塀を楯に撃ちまくった。敵は二百メートルと近づけなかった。

前線の中隊も苦戦を強いられていた。南方への転戦で数少ない友軍の飛行機が救援に駆けつけて、急降下爆撃と機銃掃射で、敵は第三陣嵩山、中岳廟方面に向かって退却した。第三大隊は密県北方の五八二高地を攻略した。この陣地は蔣介石が自ら構築した自慢の陣地で堅固だった。栄陽、密県、登封、臨汝、鞏県は洛陽の守りの要で、戦略的要衝だった。

四月二十三日、五八二高地を攻めた第三大隊（天野隊）は牛店目指して進撃し崔廟の危機を救ってくれた。飛行機はハイラルにいた第五航空軍二個中隊の二十四機だった。第一大隊、第二大隊は密県をうかがっ

ていたが、密県には、二十三日十三時十分、第三十七師団歩兵第二百二十五連隊の密県挺進隊が入城していた。第一百師団密県挺進隊は、第三百三十九連隊が当たり、二十二日、石磬溝を攻略し、二十三日に五八二高地占領後、二十四日には密県に突入し、歩兵第二百二十五連隊と警備を交代した。歩兵第三百三十九連隊は密県ではかなりの戦果をあげたようだった。

歩兵第一百連隊第三中隊が五八二高地から牛店へと進撃している間に、第一大隊と第二大隊は密県の敵を敗走させ、ここで弾薬、糧秣の補給を受け、第一大隊は馬明寺、第二大隊は告成へと直行した。第三大隊は、嵩山中岳廟の要衝牛店には四月二十九日に到着した。牛店の部落は大きな平地にあって、一個大隊が夜営しても空家が多く残るほどで、町並みもよく、油の穿油工場もあり、三年続きの河南の干ばつに遭っても余力があるようにうかがわれた。

大隊本部は街の中央に位置した。その翌日四月三十日、直撃砲を持ったかなり有力な敵が攻撃をしかけて

きたが大したことなく平静に戻り、牛店部落で糧秣の補給を受け被服も補修した。牛店には有名な漢王廟のある所で、第二大隊が占領した告成は有名な天文台のある所である。

我が第三大隊（天野部隊）は五月一日、第百十連隊の指揮を離れて、野戦重砲兵第六連隊（村上支隊）の配属となり、その援護を命じられ嵩山中岳廟の攻撃に向かった。霸王城の「ハト」の陣地を突破のとき「ドカンドカン」と巨弾を撃ち込み河南の空を震わせた連隊である。「あれを見い、大きな砲じゃのう、砲弾もわしら一人では持てんぞ」。第三大隊の将兵達は野戦重砲の大きいのに今更ながら驚いた。とにかく一門の砲を六頭立ての馬が引いて進むのだから、山の中を進むわけにはいかない。砲兵は重い砲弾を一つずつ担いで運んでいた。約八十七センチの長い弾に火薬を九リットル詰めて「ドカンドカン」撃つ瞬発である。「ヒューヒュー スルスル ズドン！」と炸裂する。その破片で大木も折れてしまう。それが大隊本部の前で炸裂するのである。

五月三日、中岳廟東方十キロの廬店に入った。ここで待ち受けていた敵の迫撃砲も機関銃の十字砲火を浴び苦戦した。天野大隊は野重第六連隊の援護を兼ね、中岳廟の山林の中を進んだ。林の中で敵味方の区別がよく分からない野重の観測が悪く、第三大隊の前で炸裂する。「ヒューヒュー シューシュー ズドン」と大木がバリバリ折れる壮絶さである。

隊長もややびっくりしたのか、着剣している私の三八式歩兵銃を「貸せ！」と言われる。銃剣を大地にドッと突いて、落ち着いたようだ。湯恩伯主力第十三軍と第二十九軍は登封を中心に、南は大雄山、北は嵩山三十六峯にかけて防備を固めていた。中岳廟は道教のメッカ、少林寺は禅宗のメッカであり、かなりの兵が駐屯していて廟の壁に銃眼を作り頑強に抵抗した。我が大隊の第十一中隊と第十中隊が銃眼攻撃を行った。連隊主力が登封を攻撃する前に、是が非でも中岳廟の敵を攻撃しなければならない。

第三大隊（天野隊）本部と第九中隊は中岳廟東部の山を占領した。あわてた敵は迫撃砲を「つるべ撃ち」

にしてきた。弾着の修正もよく、我々がいる山頂の直ぐ前で炸裂する。我々は岩陰に身を伏せたまま身動きも出来ない。「ヒューヒュー ヒュルヒュル ブルンブルン」と頭上で音が止まった。落下と同時に炸裂する。もう生きた気持ちはない、ただ祈るだけである。運を天に委ね、運天と度胸をきめた。しかし山の斜面にいたためだろうか、犠牲はほとんど出なかった。野重に敵の迫撃砲陣地の破壊を依頼したが梨のつぶてで、いっこうに音さたが無い。この日は皆、山頂で一晩を明かした。

無線で連隊本部に連絡してみると、腹背に我が軍の攻撃を受けた湯恩伯主力は退却した。敵の万以上の大軍は、我が軍の包囲網から脱却しようと伏牛山脈に向かって退却した。

五月一日、我が天野大隊は嵩山中岳廟を攻撃中、敵、新編第三十五師および第百三師の司令部指揮中枢に、馬を使わず隠密で深く進入、敵第十三軍の洛陽への合流を阻止し、野戦重砲兵第六連隊と我が大隊は、

敵の中岳廟嵩山を楯にトーチカを攻撃し浮足立っていた。

湯恩伯主力の退却を見てとった我が天野大隊長は、「時は今だ！」と突撃の命令を下した。「ウワァー！」と将兵は一気に黄蓋峰から中岳廟の境内に突っ込んだ。まさに「ひよどり越え」の逆さ落としてである。我々は黄蓋峰から中岳廟の山門まで着剣して、まっしぐら、怒とうの進撃、というより突撃である。逃げ遅れて捕虜にした者、草むらに身を伏せていた者もかなりいた。ついに中岳廟の陥落である。

その時、山門の楼上から「笛」と「笙」の音が聞こえてくる。それは、今でも私の耳の奥深く残っている。

「一の谷の平家落城」を思わせた。これは道士封禅の「雅楽」だったのであろうか。中岳廟ならびに少林寺の攻撃に際して、方面軍司令部より「文化財の保護」を命令されていたので、その配慮に努め、中側要人ならびに寺側から感謝の意がよせられたのである。

中岳廟の戦いは五月四、五日の二日間で攻略した。

天野大隊はそのまま登封に向かつて前進した。大隊は、二、三日、登封付近で過ごした。部隊は部落に入るとすぐ宿舎の準備にかかった。野砲第六連隊は、約一時間遅れて部落に入ってきた。普通なら天野大隊は野重の指揮下（村上部隊）に入っているのですが、先に着いても野重の到着を待たねばならない。ところが、天野大隊長は勝手に宿営を命じ、野重が到着しても知らん顔をしていた。兵隊はお陰で喜んだ。休むのは早いほど良い。

宿営準備が完全に終わった頃、野重の曹長が馬に乗って第三大隊（天野隊）の前に来た。「天野大隊はなぜ連隊本部より先に宿営した。なぜ連隊本部の指示に従わない」と下士官をつかまえて盛んに文句を言っている。これを聞いた天野大隊長は、馬に乗ったまま曹長の前に出ると「兵は疲れている、十分でも二十分でも早く休ませねば次の戦闘が出来ぬ。いつ来るか分からない連隊本部など待っておれん」と一喝した。曹長は一言の文句も言えず不満そうな顔をして帰った

が、第三大隊はその翌日から野重の配属を解かれ、古巢の第百十連隊に復帰したのである。それに代わり、第二大隊はここで師団の直轄となり、騎兵第四旅団（帝国陸軍最後の騎兵と言われた）に配属された。

野重の配属を解かれた天野大隊は、五月十一日に呂店に到着、戦車第三師団の配属となり、洛召公路をひたすらに洛陽へ洛陽へと急いだ。我々は広い河南の平野を、火野葦平の『麦と兵隊』の歌「行けど進めど麦また麦」を口ずさみながら行軍したのである。

当時の我々将兵は、洛陽攻撃を行うため前進（行軍）していると思っていた。何日かの長い行軍の後、第三大隊（天野隊）は、洛陽南方数キロの地点に着いた。遠くから眺める洛陽は、大きな樹木に覆われる林の中に町があるごとく思われた。町並みも古く、中国特有の城壁はなく、そのかわり深い壕で周囲が包まれている静かな町で、とても戦争が起きているとは考えられぬ静けさである。霧に覆われた洛陽の町を右に眺めながら、洛陽には突入せず、軍の命令が変更にな